

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

さまざまな職業の話

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 江口, 一久 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001822



さまざま
な職業の
話

257 奴隸とドゥーカ

奴隸がたちあがった。奴隸は大男だった。奴隸はどんな矢を射る。奴隸が矢を射るところに、(自由人の)ドゥンカという子どもがいる。

さて、奴隸はたちあがり、でかけていった。奴隸はあっちこちをうろつくといった。子どもは奴隸についていくといった。子どもは、父親から弓をゆずってもらっていた。奴隸と子どもはどんなあるいて、野原のまんなかといった。

さて、二人はアフリカクロスイギユウをみつめた。アフリカクロスイギユウをみつけると、奴隸はそれを射た。奴隸は狩人だった。子どもは奴隸についていく。子どもは曾祖父の代から狩をしていく。

さて、奴隸は子どもに、「きょう、おまえは死ぬ。アフリカクロスイギユウがやってくる」という。

さて、ドゥーカは奴隸に、「おまえさんは、奴隸で、ぼくらのあいだでぞだった。いまでも、おまえさんはぼくらの力にいたっていない」という。アフリカクロスイギユウは、鼻であらい息をしながら、やってくる。アフリカクロスイギユウが奴隸におそいかかろうとするとき、子どもはアフリカクロスイギユウに、「マーフ」とい、奴隸を自分のうしろにやらせ、アフリカクロスイギユウの頭の

まんなかを手でたたいた。そうすると、アフリカクロスイギユウはたおれた。

さて、奴隸は、「子どもよ、ドゥーカよ、もどきなさい。わたしは、おまえさんより力がある」という。アフリカクロスイギユウはアツラーにさからうもので、ころさないものはなかった。奴隸はきようこそ、アフリカクロスイギユウをころすといった。子どもは奴隸についていった。子どもは十五歳にもなっていないかった。奴隸は、「もどきなさい。おまえさんはまだ力がない」という。子どもは、「ついていく」といった。二人はどんなあるいて、野原のまんなかといった。

さて、二人は、アフリカクロスイギユウをみつめた。奴隸は弓をもつてくると、アフリカクロスイギユウを射た。アフリカクロスイギユウは二人をみつけると、やってくる。

さて、子どもは、「ぼくはおまえよりううえだ」といった。奴隸は、「わたしは木にのぼるわけにはいかない」といった。アフリカクロスイギユウがやってくる。子どもは、奴隸をひっぱり、アフリカクロスイギユウに、「マーフ」といい、手でアフリカクロスイギユウの頭のまんなかをたたいた。

さて、子どもは奴隸をつかみ、自分のうしろにやった。

さて、二人は家にかえっていった。

さて、子どもは奴隸に、「奴隸よ、おまえはいろいろな術を手

いれたけれども、いまでも、おまえの術はここにいる人におよばない。ほくのほうがある」という。

さて、そこにいた人が奴隷を夜の集いにつれていった。

さて、人びとは屋敷にすわって、夜の集いをしていいる。

さて、人びとはダーウィエの息子の話をしなさいという。奴隷

はダーウィエの息子のドゥーカは十五歳にもならないといった。

さて、奴隷はそこにいた人たちに、ダーウィエの父親は狩人の

王さまで、そのおじがジョーデイであるといった。

さて、奴隷は、「村長デアルよ、ドゥーカがいなかったら、きよ

う、自分はアフリカクロスイギユウにころされていた」という。

さて、そこにいた人たちは、「おまえはうそをついている」とい

う。奴隷は、「わたしはうそをつかない。あそこにドゥーカがいる。

そのとおりだ。ドゥーカはばつとでてくると、アフリカクロスイギ

ユウに『マーフ』といい、わたしのところやってきて、わたしをう

しるにやってしまった。なんとということか」といった。

さて、この話はこういうこと。

(一九六四年九月、語り手 ウォダーベ・ホントルベ氏族のもの、

ガウンデレ地方のヤルンパンのちかくのパバ村にて)

258 マルアの盗人とガルアの盗人

二人の人がいた。一人はマルアのような町で盗人をしていいた。もう一人も、ガルアのような町で盗人をしていいた。

さて、ガルアの盗人はマルアでなにがぬすめるかかんがえた。

さて、男は襤褸切れをさがした。襤褸切れをさがすと、まっさら

な布地を手にいれた。男は襤褸切れをしばらく、まっさらな布地を

もってきて、そのうえをすしおおっておいた。人に、布地の束を

はこんでいるようにおもわせるためだった。わかつたな。男はそれ

をうりにいこうというわけだ。わかるな。男は男の町でどのように

してぬすんだらよいかわからなかつたからだ。男はこのようにして

おいて、べつの土地にいて、人をだまそうというわけだ。

さて、マルアの盗人があちらの土地ガルアで、どのようにしたら

ぬすめるかかんがえた。うまい考えがでてこなかつた。男は襤褸布

の束をあつめた。男は荷物をつくつた。男は塩をちいさなかわらけ

にいれてもってきた。男はそれを荷物にできている穴のところにつ

けた。その荷物がすべて塩であるかのようにおもわせるためだ。男

が塩を束にしたものをはこんでいるようにおもわせるためだ。ガル

アの盗人がたちあがった。マルアの盗人がたちあがった。男たちは

どんだんやってくる。二人はやってくると、であった。ガルアの盗

人も相手の男が盗人であるとはしらない。マルアの盗人は相手の男

が盗人であるとはしらない。ほんとうのこと、二人は盗人だ。二人はおたがいのことがわからない。

さて、二人は木陰でであった。二人はやすんでいるとき、挨拶をかわした。一人が、「元気か」という。もう一人が、「元気だ」という。一人が「体は大丈夫か」という。もう一人が、「いまのところ大丈夫だ。おまえさんはいかがか。この世の苦勞はどうか。計画をたてても、できなかったことはあるか。それで、おまえさんの子どもたちはどうだ。それで、おまえさんの仕事はなんだ」という。

さて、マルアの盗人が、「おねがいだ、友よ。おまえさんにたずねさせてもらう。みてみなさい。ここにわたしの荷物がある。これはみんな塩だ。わたしはこれをつたけれども、つかれてすすめなさい。わたしがいくと、おまえさんたちの町で塩をかう人が手にはいるか」という。

さて、ガルアの盗人がそれをうけて、「おまえさんはそれをうれる。どうして、うれないなどというのか。みなさい。兄弟よ、ここにわたしがこんでいる荷物がある。これはみんな布だ。ガルアで布がやすくなった。ここにわたしがこんでいる荷物がある。これはみんな布だ。わたしはこれをもっている。わたしはおまえさんたちのところで布でもうけられるし、女たちは腰布にすゝる布を手にいれられないときいた。でも、わたしはこれをもっている、市場でもうけようとおもっているのだ」という。さっそく、

マルアの盗人が、「それでは、荷物を交換しよう。わたしはおまえさんたちのところでなにももうけられるかわからない」という。

さて、二人は荷物を交換した。どちらも、相手をだましたとおもっているではないか。荷物を交換すると、マルアの盗人は布のほいつているという荷物をマルアのほうにはこんでいった。もう一人は塩のほいつているという荷物をガルアのほうにはこんでいった。どちらも、どんなすすんでいく。どちらも、相手をだましたとおもっているではないか。どちらも、相手が取引をおもいとどまらなように、相手からにげきろうと、はしつていく。二人はおたがいからとおくにはなれた。マルアの盗人はマルアにちかづく、荷物をほどこいた。男は、「不信心者め、わしはあいつをだましてやった。きょうこそ、ひどい目にあわせてやった」という。男が荷物をあけてみると、塩はちいさなかわらけにはいつているだけだった。男は、「あいつは不信心者だ。あいつは、アツラーに盗人の子としてうまれさせられたのだ」といった。この男は盗人なのに、盗人なののはいつている。男は、「あいつは、おそろしい盗人だ。あいつは、父無し子だ」という。もう一人の盗人はとおくにいき、ガルアにちかづく、すわつて、「ああ、あいつをだましてやった」といった。男が荷物をあけてみると、ほんのすこしあたらしい布地がほいついただけで、残りは役にたたない襤褸切れだった。男は、「したがうべきものは、アツラーのみ。不信心者め。わしはぬすまれた。あ

いつにぬすまれた。したがうべきものは、アツラーのみ」といった。二人とも、体から力がぬけていった。この二人のうちどちらが、より上手に相手をだましたか。おまえさんたちには、わかるだろう。

(語り手 一九七一年一月二日、パーセーウオ村出身のアブ
ドゥッラーイ・オスマース、マルアにて)

259 盗みの上手な子ども

二人の幼友だちがいた。二人に子どもができた。一人に子どもができた。もう一人にも子どもができた。二人の幼友だちは泥棒だった。

さて、一人が、「友よ、わしが死んでも、子どもにはわしらの仕事をやらせておくれ」という。もう一人は、「よろしい」という。二人はそのまま何年かいっしょだった。

さて、一人が死んでしまった。

さて、父親に死なれた子どもが七つになった。子どもは父親の幼友だちに、「おじさん、父さんは死ぬとき、ぼくに盗みをおしえるようにと、いわなかったか。ぼくは、もうおおきくなった。ぼくに盗みをおしえておくれ」という。男は、「おまえはおおきくない。まだおおきくない。おおきくなってからだ」といった。子

どもは、「おおきくなった」といった。男と子どもはどんなあるいていった。男は子どもに、「こい。いって、わしはおまえには無理だということをおしえてやる」という。二人は道があるいていった。二人はそこにいる人たちをみんなみる。子どもはそこらを見て、「ぬすもう」といった。男は、「その人はねていない。その人は自分のものをほっておいていない。どうして、その人のものをぬすめようか」という。子どもは、「その人が死なないと、その人のものをぬすめないというのか」という。

さて、二人はいった。二人はある人がロバと雌ヒツジをひっぱっていくのを見た。もう一匹家畜をひっぱっている。家畜はうしろをぬすめないのか、おじさん」という。男は、「どうして、その人のものがぬすめるのか。その人は自分の家畜をほっておいていない。みてみる、その人は自分の家畜をもっている。みる、雌ヒツジがいる。人がいる。どうして、その人のものがぬすめるのか」という。男がすわった。子どももすわった。子どもは、「よろしい、よろしい、よろしい」といった。子どもはさきにあるいていった。子どもはよいなまの草をさがした。子どもはさきにあるいていった。子どもは草をどこかにいれた。道行く人が三匹のロバをつれていったではないか。

さて、雌ヒツジがとおすすぎる。ロバの飼い主の男は子どもがも

の男はぼくをみていない。ぼくは雌ヒツジをとり、荷物ごとロバをとった。あの男の服もとった。あの男の帽子もとった。そのあいだずっと、あの男はぼくをみていない」という。父親の幼友たちは、「どこかにいってしまえ。おまえは盗みができる」といった。二人はわかれたとさ。

お話は、おしまい。

(一九八三年一月一九日、語り手 ナーナ・ジージワ、ガウンデレにて。ナーナはガウンデレ出身)

260 農夫と王さまの畑の番人

ちいさなお話、ちいさなお話。屋敷の主の頭のうえに、穴のあいだ半截ヒョウタン。

わかるか。三人の盗人が話をし、ある人のところにぬすみにいった。あるところに、老人がいた。老人の仕事は畑をたがやすことだけだった。老人は畑をたがやし、モロコシをつくり、モロコシの穂をウスにいれて、つき、モロコシの粒で穀物倉をいっぱいにする。盗人たちはいつもやってきて、老人の穀物倉のなかからモロコシをぬすむ。老人は王さまのところに行って、王さまにその話をする。老人はなしている。王さまは老人に、「どういふことなのだ」といった。老人は、「わたしにわかりますか、王さま」といった。王さ

まは、「よろしい。わしはおまえに番人をやる」といった。老人はモロコシをつくった。モロコシがみのった。老人はモロコシの穂をウスにいれて、つき、モロコシの粒を穀物倉にもつていき、穀物倉にいれた。王さまが畑の番人をおくったので、老人は番人を手にいれて、おちつくはずだった。

さて、老人はいる。一人の盗人が屋敷にはいり、いくと、老人がいた。老人はよめさんとよこになっている。

さて、盗人は老人を何度もさわってみる。盗人は老人の髭をにぎり、力をいれてぬいた。盗人がいくと、屋敷のまんなかの通り抜けのできる小屋にもう一人の盗人がいた。髭をぬいた盗人は、「これを屋敷のまえにいる仲間にもつていけ。老人が気がつかないうちに、モロコシをぬすもう」といった。仲間は、「よろしい」といった。老人は大声をあげた。王さまにもらった番人たちはねている。番人たちは、「なんと、お呪いが盗人をつかまえた」という。老人はずっと大声をあげている。夜があげて、朝になった。盗人はどこかにいってしまった。盗人は老人のモロコシをとれなかった。老人がいくと、王さまがいた。老人は王さまに、「王さま、盗人はわたしの力ではどうしようもありません。わたしはどうしたらよいかわかりますか。ごらんください。きのうの晩、盗人たちはわたしのしらないあいだに、わたしの髭をひきぬきました。ひよつとしたら、精霊の仕業かもしれません。わたしにはわかりません」といっ

た。王さまは老人に、「なんだって。イスラム教の先生はどこにいる」といった。人びとはイスラム教の先生をさがしにいった。人びとはイスラム教の先生をさがしにいった。イスラム教の先生がやってきた。王さまはイスラム教の先生に、「先生、盗人たちがずっとこのようなことをしてくる。おねがいだ、おまえさんの知識で、盗人たちをつかまえてほしい。盗人たちをつかまえてくれたら、なんでも、百ずつやる」という。先生は、「よろしい。問題はない」という。日暮れとき、先生は屋敷の主人が穀物倉にのぼって、モロコシをすくい、木綿の布、おいしいもの、カボチャなどをとりだすのを見た。先生は、「よろしい」といった。先生は盗人と話をつけておいた。先生はただの紙をみている。ほんとうのこと、先生はコーランの勉強をしていない。その紙は袋からとりだしたただの紙だった。盗人たちがやってきて、先生をころすというのと、先生は、「ころすのをよせ、よせ。いっしょにぬすもう」という。先生はいつて、すわった。先生はいくと、まんなかにすわった。先生は盗人たちに、「まで。わたしが大声をあげると、あの老人の小屋の入り口にいく。わたしは大声をあげる。なにをしてくるかときかかれると、わたしは、夜がふけたので、精霊と話をしているという。盗人がきても、おいかえずといつてやる」という。先生はいくと、老人の小屋の入り口にすわった。先生は大声をあげている。先生はずっと大声をあげている。

さて、老人は先生に、「どうしたのか。盗人たちをみたのか」という。先生は、「わたしは精霊と話をしているのだ」という。ほんとうのこと、盗人たちは穀物倉のなかで、一生懸命モロコシをすくっている。盗人たちはモロコシをすくっている。盗人たちはいつてしまった。夜明けとき、先生は自分の紙をまいて、いつてしまった。みんなが盗人の番をたのんだ先生もいなかった。まして、盗人がいるわけがなかった。穀物倉はきれいにさらえられていた。屋敷の持ち主がお腹をすかして、穀物倉をひらいてみると、なかにはなにもなかったとき。

お話は、おしまい。ウサギの蒸し焼きができた。

(一九六九—七〇年、語り手 パーセーウオ村出身のアドツラ

ーイ・オスマース、マルアにて)

261 蜂蜜の盗人(1)

ちいさなお話、ちいさなお話。世間話、世間話。

わかるかな。あるハンセン病にかかった男が人びとのところに蜂蜜をぬすみにいく。男は蜂蜜をよくぬすむ。

さて、ある男は蜂蜜をとるのが仕事だった。男は野原で蜂の巣をとる。男はやってくると、自分の日除けのうえに蜂の巣をおいておく。日除けのうえにおいておくと、蜂蜜が蜂の巣からしみでてく

る。男はその蜂蜜を容器に入れる。いつもそのようにしている。男が蜂の巣をとり、もってきて、日除けにぶらさげておいた。そうすると、蜂蜜がしみでてくる。ハンセン病にかかった盗人はやっていると、日除けにのぼる。手の指はすっかりおちてしまっている。足の指もすっかりおちてしまっている。体中、傷だらけだ。日除けにのぼると、蜂蜜をどんとたたべていく。蜂蜜をとる男は、「なんだって、みななもの、わたしはいつもここに蜂蜜をもってくるのに、なくなる。だれがぬすむのだろう。よろしい、アッラーがゆるされるなら、その盗人をつかまえてやる」といった。

さて、男は蜂蜜をとりいき、やってくると、蜂の巣を日除けのうえにおいておいた。蜂蜜がしみだしてくる。ハンセン病にかかった盗人がやってきて、その蜂蜜をたべてしまった。男は、「よろしい」といった。男は灰汁をにて、蜂蜜のようにどろどろにした。男はそれをもつてくると、日除けのうえにおいておいた。

さて、ハンセン病にかかった盗人がやってくると、道に仲間がいた。盗人は、「なんだって、友よ、不信心ものよ、おまえさんはなにもせずにすわっているだけだ。おまえさんはどうしようもない。あそこで、いいものがわしらからにげていく」といった。仲間は、「おねがいだ、いいものがどこにあるかおしえておくれ」という。盗人は、「こい、友よ。あそこに蜂蜜がある。いって、ぬすもう」という。二人はでかけていった。二人はどんだんあるいていく。二

人は蜂蜜をとる男の屋敷のまえまでいった。二人は屋敷のなかの様子をみた。二人は蜂蜜の持ち主がいらないのをたしかめた。盗人は、「よし。蜂蜜の持ち主がいらないから、あの蜂蜜をぬすんだほうがよい」といった。

ほんとうのこと、蜂蜜の持ち主はかくれて、二人をみている。お日さんのおかげで、灰汁はまっかになつていいる。蜂蜜の持ち主はそ

のなかにトウガラシをいれておいた。
さて、ハンセン病にかかった人たちは日除けにのぼっていった。二人は日除けのまんなかについた。

さて、盗人が仲間、「みてみる。これはみんな蜂蜜だ。友よ。こい、友よ。おまえさんは腹がいつぱいになるまでたべればよい、友よ」といった。仲間は、「なんだって、わたしはハンセン病にかかっているのに、これをみんなたべてしまえというのか。友よ、おまえさんはいつもやってくる。おねがいだ、わたしにすこし、蜂蜜をたべさせておくれ」といった。盗人は、「なんだって、友よ。それではいけない。わたしはおまえさんをつれてきているのに、わたしより目がはやい」といった。

さて、二人とも、両手を灰汁のなかにもつていった。二人はどちらも両手を灰汁のなかにもつていき、灰汁をとり、口にもつていこうとする。灰汁は盗人たちの傷口にしみこんでいく。
さて、一人が、「わたしは大声をあげる、友よ」といいはじめた。

もう一人が、「大声をあげるな、友よ」という。一人が、「アッラーにかけて、わたしは大声をあげる。ケレレレレ。わたしは大声をあげる」という。もう一人は、「大声をあげるな」という。一人が、「わたしは大声をあげる」という。蜂蜜の持ち主は人びとをよんだ。盗人たちは日除けのうえで、よこになり、大声をあげている。盗人たちは蜂蜜の持ち主にみられていないとおもっていた。とうとう、人びとがやってきて、盗人たちをつかまえたとき。

この話は、おしまい。

(一九六九—七〇年、語り手 パーサーウオ村出身のアブドゥッ
ラーイ・ウスマース、マルアにて)

262 蜂蜜の盗人(2)

三人の人がでかけていく。目のみえない人とハンセン病にかかった人と足のわるい人だった。三人はあつまって、でかけていった。三人はいくと、盗みをして、家にかえってきた。三人はやってくと、木のしたにすわった。ドゥームヤシの木の下にすわった。わかるかな。盲人は、目がみえないではないか。三人は盗みをしたとき、目のみえない人をたすけて、にげた。三人はやってきて、木のしたにすわった。

さて、目のみえない人が木のしたにすわっていると、ドゥームヤ

シの実が目のみえない人のうえにおちてきた。

さて、目のみえない人は、自分がぬすんだのではない、ぬすんだのは、そのよこをうるついているものだった。ドゥームヤシの実が目のみえない人のうえにおちてくると、目のみえない人は、「だれとぬすんだというのか。わたしが一人で盗みをしていない。わたしたちは三人で盗みをした」という。三人はすわっている。人びとは三人をつかまえた。人びとは三人をつれていくと、なんどもたたいたあげく、はなしてやった。そのあと、またしても、三人はもどつてきて、道のあるいていく。三人は蜂蜜をぬすみにいった。いつも、三人はでかけていって、蜂蜜をぬすむ。人びとはこの三人をつかまえられなかった。いつも、三人はいつて、蜂蜜をぬすむ。さて、ある日、蜂蜜の持ち主は灰汁をとった。蜂蜜の持ち主は灰汁を蜂蜜のなかにいれた。わかるかな。いつも、三人がいくと、ハンセン病にかかった人がこのようにして、蜂蜜をなめて、おいしいか、おいしくないか、味をみてる。まずかったら、三人は蜂蜜をそのままにしておく。

さて、ハンセン病にかかった人が蜂蜜をとり、その味をみてみた。この男は蜂蜜の味をみながら、手を蜂蜜のなかにいれると、灰汁が傷口にしみこんだので、傷口がいたくなりだした。男は、「きょうはいたい」といった。一人が男に、「なにがいたむのか」といった。男は、「わたしはおまえさんにいたむといっている」

といった。一人が、「ああ、なにがいたむのか」という。男は、「これは蜂蜜ではない。わたしは大声をあげる」といった。もう一人が、「おまえさんは、ぬすみなれている。どうして、おまえさんは大声をあげるのか」という。男は、「ほんとうに、わたしは大声をあげる」といった。もう一人が、「どうして、おまえさんは大声をあげられるのか。おねがいだ。よしておくれ」という。男は、「ほんとうに、わたしは大声をあげる。この口はおまえさんの口かい。それとも、わたしのものか。わたしはおまえさんに大声をあげるといったではないか」という。男は、「ああ、ああ、ああ」と大声をあげだした。人びとはやってきて、三人をつかまえて、小屋にとじこめたとき。

このお話も、これでおしまい。

(一九八三年一月二三日、語り手 アーマドゥ・ルファイイ、ガウンデレにて。この話は、近所にすむハウサ族の女がハウサ語ではなすのをきいたという)

